

桃太郎と日本文化—第1回—

…The Story of Peach-Boy & Japanese Culture; Pt. 1…

奥泉栄三郎

(シカゴ大学・東アジア図書館日本図書館長)

I. 挙国決戦下の「桃太郎」

近代日本の歴史の中で、教科書が子供たちに与えた影響は絶大なものであった。他にこれといったメディアの存在していなかった時代においては、そこに掲げられた「童話」の人間形成—臣民—におよぼした影響力には、はかり知れないものがあつた。かの有名な『菊と刀』の著者、ルース・ベネディクト(Ruth F. Benedict, 1887-1948)は、日本の子供と西欧の子供の成長過程を比較して、そこに東洋的社会と西欧的社会の対照をみてとつたが、これは当時としては大した慧眼であつたと私は思う。子供たちは一国のその時代の映像であり、社会の反映であるとは、ことの本质を鋭く見抜いた言説である。皆さんも私も、昔はみんな仲良しの子供であつたのである。

わが日本には、昔から五大童話または五大昔噺といわれる「桃太郎」・「猿蟹合戦」・「舌切雀」・「花咲爺」・「かちかち山」というのがあり、それが文字や絵として記録化されたのは江戸の中期、口承されはじめた時点を検証してみると、これはもう室町時代までさかのぼるようである。近・現代になると、上記の各ストーリーは教科書や民間雑誌の記事・学校唱歌・アニメ・マンガ・紙芝居・ラジオ・テレビに登場する。つまり、みなさんは御幼少時に学校と学校外で五大昔噺を聞かされ、読まされ、みせられて(あるいはむさぼり楽しんで)御成長遊ばされてきたのである。それはそうなんだけれども、軍国主義時代の純心な母がわたしたちの枕



元で読んでくれた本には、何か異質な内容と意図がちりばめられていたのも、今してみればこれもまた事実であり、ここでは「桃太郎」を中心に物証をあげつつ、容易には目に見えなかつた「世の中」とか「世界」とか「歴史」の部分—日本文化の原形—をいささかなりとも解きほどこいて見たいと思う。

それには日本が今世紀に直面した「戦時」とその周辺から立ち入ってゆくのが、いちばん良いかと思う。第二次大戦が終結して50周年という節目のなかで、「桃太郎」が私の身体と頭に來復してやまないのには、それなりの理由がないわけではない。「桃太郎」が誕生して今日まで過ぎ経てきた次第が、調べてゆくにつれ、「日米交渉文化史」の局面でも無視できないものとなつてきたのである。たまたま私は、曲りなりにも米国で日本研究をこなせる環境に身を寄せ、長期にわたる滞米生活体験(上には上があるが)の視点で、「太平洋戦争(日米戦争)」を対象に作業を進めてきた者である。この戦争自体は足かけ5年という短期

のもので、永い歴史のスパからみればほんの「一事件」にすぎない、と見る立場もあろう。けれども、この戦いの準備期間とその後に引き続いて今日に至り、かつ遠い未来に向う日米両国関係を広く視野に入ると、やはり、たかが真珠湾されどまた真珠湾ということになるのである。このような文脈の中でさえ、「桃太郎」はわたしたちと共にあり、時には「彼」をメイン・キャストに登用した。ここまでくるとそろそろしい。

日本が敗北して占領軍（GHQ・事実上米国陸軍主体）が上陸してきた昭和20年（1945）に、占領軍は直ちに「桃太郎」を教科書と学校教育から追放した。徹底した日本の民主化・非軍国主義化——従って旧日本の解体——という日本占領管理の基本政策の下で、「桃太郎」は一言の弁解の機会もないまま身をひかされ、再び日本の子供たちの目の前に現れるまでかなりの年数を費やすこととなってしまった。例の「兎と亀」の童話は、もともと明治6年の『通俗伊蘇普物語』（イソップ物語）あたりからポピュラー化してくるが、これとて修身や国語の教科書では、当時のファシズム路線のなかですでに時局的偏向を見せていた。

『兎。亀の行歩（あるきかた）の遅きを笑ひ。愚弄して「コウ。ここへ来や。競争（かけっこ）をしやう。乃公（おれさま）の足わ何で出来てると思ふゾ」と威張れば。亀わ迷惑にわ思へども一ツ処へおし並び。サアと云れて寸分（ちつと）も猶予せず。例の通り遅々（のそのそ）とあるき出す。』ではじまる「兎と亀」の童話は、その昔の日米両国の出会いの情景をあますところなく表現しているかのようであった。が、国定教科書五期国語『ヨミカタ』（二）上では亀が逆転勝利をあげて「バンザイ」しているのであって、いつの間にかイソップ物語までが、将来の日米戦争の想定に結びつ

けられている。むろん、日本が「亀」、米国が「兎」であったことは云うをまたない。

こんなあんなくらいだから、気はやさしくて力持ちの「桃太郎」ともなれば、日本の“世間”が放っておくわけがない。その身が日本帝国政府や軍部の「富国強兵」策の看板に利用されるのは、もはや時間の問題であった。

わが日本の製作した最初の長篇（漫画）アニメーションが、『桃太郎の海鷲』（文部省推薦長篇漫画・全5巻、海軍省後援、芸術映画社製作、製作・大村英之助、演出・瀬尾光世、音楽・伊藤昇、昭和18年（1943）であったことは、歴史の一項目程度には特筆しておく必要がある。桃太郎の鬼征伐になぞらえて「真珠湾奇襲」の大戦果（？）を喜んだのは、何も御本人ばかりではない。大方の日本人——大人も子供も——がこのスクリーン（当時は銀幕と云っていた）と饒舌なナレーションに酔いしれてしまっていたのである。この国策漫画映画は、製作期間10ヵ月を要し、作画10万枚規模といわれるもので全国の映画館で喝采をあげた。当時のある映画館のチラシに、「お伽話の英雄で鬼ヶ島の鬼征伐をした桃太郎の意欲こそ決戦下の子供の持つべきものである。」とあるが、これ何に事ぞ。どうして、“子供の持つべきもの”なのか。

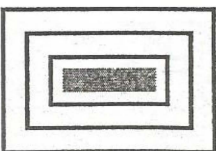
同じ頃、東宝系では総力を結集してミュージカル（音楽劇）「桃太郎」を上演中であつた。挙国決戦体制下（但し、戦局はすでに日本の劣勢に転じていた）のそのプログラムによると、「鬼ヶ島総督無条件降伏する」（第3部第33場）などという一幕があり、桃太郎役はデコちゃんこと高峰秀子であつた。

かくも変身してしまった「桃太郎」像を、占領軍とて許す手はなかった。〔続く〕



桃太郎と日本文化—第2回—

...The Story of Peach Boy & Japanese Culture:Pt.2...



奥泉栄三郎

(シカゴ大学・アジア図書館日本図書部長)

2. 鬼の考現学

分かっているようで分かっていないのが、桃太郎と鬼の像である。だいたい、全体としての桃太郎も不思議さいっぱい。研究の宝庫だ。今回は鬼についてしばらく触れてみたいと思う。言葉としての「鬼」を定義して見たところで大した意味はないと思われるが、『広辞苑』流に一言で云うと次のようになるであろうか。

「鬼」は「隠」(おに)で姿が見えない意である。

これは一体どういう意味であろうか。姿が見えないということは、想像上の怪物であっても良く、恐ろしいものや怖いものの強調であっても良く、仏教用語でも良く、化けて人間世界に現われる悪のすべてでもある。例えば、「コノ鬼婆メ」とか、「あいつは鬼だ」、などと人から指をさされたら、人格とか人柄という意味で相当に問題がある。ところが、「中村さんは仕事の鬼だ」とか、黒沢明を「映画の鬼才」とか云った場合、これはある事に精魂を傾ける人を形容した表現で、通常は人を評価した言葉である。中村さんは平均的な自分よりはるかに事に打ち込んでいる人、とってあげている例なのだ。しかし、この場合といえども、軽妙なからかいかユーモアの意味がはいっており、使われた場所や人間関係、時代などなどによって、意味合いは大きく異なることも知っておくべきこと。子供の遊戯のひとつである鬼ごっこの鬼は、はたして弱者なのか強者なのか判定しにくい例。もの陰に「隠れた」つもりの子供が、おしりを出したりしていて最初に鬼に見つかれ



ば、今度はその子が次の鬼になる。新しい鬼が酷悪な子ときめつけるように云ってしまったら鬼が笑う。鬼の出没は、本来、隠れているもの、外界にあらわれないものが、突如として出現するからこそ効果があるのである。政治家中曽根康弘が総理の座を去って久しいが、時々今でも説得力のある発言をくりかえしている。彼のような存在を「隠」然たる力、つまり、鬼のような力をもっている人ともいうから、彼もまた本身は鬼なのかも知れぬ。まさか？

日本では、節分に「福は内鬼は外」と叫びながら大人も子供も家庭や社寺で豆まきを楽しむ。この言葉の奥義を分析してみると、すべての鬼は悪者となる。そうなんだ

うか。

誰もが、民族の文化の差や特徴を論ずるときや日常の暮らしの中でもしばしばやっつけてしまう間違いの一つに、物事を一把一絡げに観察してしまう誤りがある。たとえば、「シカゴはカポネの街であり、映画『アンタッチャブル』の街であるから、(故に) あそこはとんでもなく恐ろしい場所(ところ)だ」、と。シカゴに一度も来たことのない人が、これほどまでに豊富で確信犯的な情報をもってしまうと、この地点から外へ飛び出すことは精神的にも物理的にも容易でない。新村出編する『広辞苑』(岩波書店)で「桃太郎」の項目をみると、「昔噺の一。桃の中から生れた桃太郎が、犬・猿・きじを連れて鬼ヶ島の鬼を退治するという話。室町時代の成立で、時代色を濃く反映し、忠孝勇武の徳を謳歌してある」とある。一定の文字数制限の許では、疑いもなく無難で代表的な説明ではある。しかし、何一つ動機や理由もあげないまま「鬼ヶ島の鬼を退治」までしてしまう心理の深層には、ただならぬものがあるように思われる。「退治」が、「退散」とか「降参」とか「降伏」という中味であれば、命は助けてやることだからやや救われるのだが。

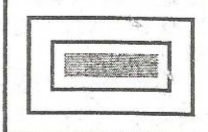
大正文壇の花形で30代半ばで自殺した芥川龍之介(1892~1927)は、今でも日本の老若男女と文学界に絶対的な影響力のある作家であるが、21世紀用に遺言的で優れた短編作品をひとつ遺して逝ったように思う。芥川の『桃太郎』の文学的価値には立ち入りはしない。わたくしが特にこの作品に注目しているのは、辺見庸あたりも云っているような現代的で未采的な芥川のメッセージである。不健康がつづく中で、気軽にしかもやや力を抜いたような戯作のような作品

群のなかにも、歴史小説家として芥川の眼は光っていた。芥川にとって、

「桃太郎とは、強欲で狡猾、吝嗇にして酷薄である。鬼ヶ島は楽土であり、鬼は元来平和主義者であった。これを侵す人間とは、鬼に言わせれば、「何ともいはず味の悪いもの」ということになる。没後約70年、人の世は彼の予感の通りに、いとどしく薄気味悪い。いま、黒洞の闇夜に芥川龍之介の眼はますます冴えて、偽善の一切を射抜く。」

左様、問われているのは鬼ではなく、桃太郎である。国定教科書的に言えば、桃太郎は「気はやさしく力持ち」というのが相場であるけれども、類話の中には、桃太郎は遊んでばかりいるとか、皆が働いているのに何もしていないでいる、という質(たち)の悪い筋のものが割とある。

次に、鬼の住むという「鬼ヶ島」の所在も気になるところである。明治・大正・昭和前期の三代にわたる最高の国際人で、五千円札の肖像にもなっている新渡戸稲造は、「隠」然として鬼ヶ島征伐論を唱え、これは南洋諸島の総称である、といいきった。すなわち、彼によれば「鬼ヶ島は為朝時代のその昔、八丈島であった。ついで「鬼ヶ島」の呼び名は日本人の南進と共に愈よ南に移り、琉球、台湾へと進み、島なお遙か南にあるかぎり日本国民の海外発展の志向は燃え、ゆきて行き着いたところが大東亜共栄圏構想であった。この際序(ついで)に言えば、「鬼ヶ島」の宝とは即ち熱帯地方の農産物を指した。流石に日本国農学博士第1号でもある新渡戸稲造(東大教授・国際連盟事務次長等歴任)は、宝は「田から」なり、と説いている。



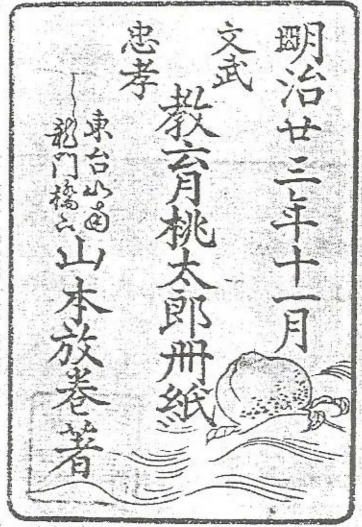
(前号から続く)

3. 桃太郎と教育勅語

今回は時代を遡って明治時代の「桃太郎」を中心に観察してみたい。明治といえば、日本は発展途上のただ中であつた新体制の若い国家であり、それはちょうど車のギヤをセコンドからトップにチェンジしたような時代であつた。桃太郎の海外進出の雄姿とその征伐成功という構想が、いかにもこの国の建国と国家目標にぴったりと重なるものであつた。いわば、世の中自体にも「桃太郎」をこども達に対する国民的教訓漸として容易に変容し得る要素が底通してあつたのである。「桃太郎」は、明治時代以後、教科書だけでなく、いろいろと変容したり、フィクションを加えたりして、あらゆる機会——学芸会・運動会の仮装行列・学校コーラス会・縁日・村祭・収穫祭——とメディアを通じて児童に与えられるようになった。それどころか児童教育にかこつけて、大人の世界がはしゃぎすぎている躍進日本の原風景がここにある。だいたい、世の中が大きく移り変わるとき、そこには地下とか、背景とか、予兆とかいうものがみられるのである。そんな角度から照射してみると、明治期文明開化過程の中で桃太郎が余勢をかつてくるのも当然のことであつた。江戸期において次第に国学系統の学問が発達してくると、桃太郎の発生を遠く古事記や日本書紀に求めて、その銚先は皇学主義的イメージの台頭につながっていく。天津神が地上に降ろされて「桃太郎」の誕生となり、皇国は絶対的な善で、これにそむくものは鬼であり鬼は退治される運命。要するに、「天に代わり不義を打つ」のは、ほかでもなく東亜の盟主皇国日本であるという単純明快な論法である。明治も下つて23(1890)年になると、大日本帝国憲法や皇室典範にひき続き、府県制・郡制が公布され、第一回衆議院議員の総選挙が行われるなか、あの有名な「教育勅語」が發布される。いちはやく、『文武忠考教育桃太郎草紙』という本が出版されたが、これも成り行きというものであつたと云えよう。和紙に色刷りの絵本で、要するに教育の柱である教育勅語を桃太郎童話と結び付け、絵解きの方法をこころみた小冊子であつた。鬼ヶ島からの戦利品を天上(天子様=天皇)に献ずるというおきまりの筋書である。上記絵本の著者である山本放巻(こともあろうに本名を「正義」といった)という人物は、東京下谷のある私立学校の経営者であるが、「聖諭ヲ拝誦シ歎喜ノ至リ二堪ヘズ」この絵本を著わしたと興奮気味に述べ、巻頭と上欄に教育勅語を掲げている。発行先は松本平吉とあり、和装七丁仕上げの私家版風の絵本ではあるが、勅語の下欄には時の文部大臣芳川顕正の訓示が掲出されていたり、アイデアとしてまんざらでもない。「勅語を

奥 泉 栄 三 郎

(シカゴ大学・アジア図書館日本図書部長)



奉読し且意を加へて諒々誨告し生徒をしてしゆく夜に 佩服する所あらむべし」と大臣の言葉の直接引用で結び、庶民に親しまれている桃太郎を「教育勅語」図解として扱ったものである。それにつけても、平均的な世の親たちをも含めて、誰がこんな難解な訓示を音読し意味を正確に理解できたのだろうか。昔は大人もよい子もみんな、よほど教養が高くて優秀だったのではあるまいか。そうでないとしたら、その頃から日本中で、空念仏か丸暗記の徳目を唱えはじめたことになる。

とにかく、上記は昔漸の教訓転用の一典型であつた。桃太郎漸は明治時代的で、なんといってもその内容は開発的・膨張型であつた。それだけ、他の代表的な昔漸のストーリーが、そろいにそろって「一寸ぼふし」の如く小さ子的で「縮み志向」の内容であつたということも、また見逃せない。身体(なり)は小さいが、やる事業(こと)はでっかい、とこうこなければもはや世間が湧かない。本書は冒頭に、「桃太郎さんのお話しは、この建国思想たる大和魂を、私共国民に古くから永く培つて来、又将来も培つて行くべき、大切な使命をもつたお伽漸であります。私は国民精神作興、思想統一のために、慎んでそのいはく因縁をお話させていただきます」と述べ、結論として、こうした桃太郎は「まったく教育勅語の実践窮行者でありまして、実に世の模範とすべき人物で日本魂の権化と謂うべきであります」と。おやおや、赤鬼青鬼たちに襲撃されているわれら庶民の両親と赤子が描かれているのではないか。征伐の正当な理由を察知させようとして心理作戦に出ているのだな。あつ、桃太郎を「勉強家」として印象づけようとしているな。上欄の「学ヲ修メ業ヲ習イ」、「知能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ」にうまーく対応しちゃうてるよ。賢所に参拝の後、船で征途につく。それを見送る「父

母国民」。勇をふるって鬼を征伐した桃太郎は、「その罪をにくみて、その人をにくまらず」、鬼ヶ島に仁政を施す。そして、桃太郎は凱旋して「捷」(かちもの)〈戦利品〉をお上に献上、メダタシ、メダタシ。こうした明治教学体制思潮は、あたかもとどまるところを知らぬごとくに肥大化し、速度をはやめ力を増して大東亜戦争の「聖戦」イデオロギーへと突き進む。例えば、昭和6年に出版された大石末吉著の『教育勅語 桃太郎訓話』の如きは、鬼は欧州戦争そのもので、鬼ヶ島の中心地は当時「日本の平和の敵であった」ドイツということになっている。

ところで、「教育勅語」などという言葉は、わたくしたちの世代にはまったく縁のない専門用語であったはずだが、この国アメリカにきて、博士課程の学生さんなんか「英語で教育勅語を読みたいが・・・」などと質問されてドッキリ。英語にしてみれば、アレは宇宙の真理みたいなものだ。今からして思えば、ゆめゆめ運用を間違っただけかんとということだろう。だからだ。日本が太平洋戦争に敗北を喫すると、GHQ(占領軍つまり米国)はこの教育勅語の存廃にけっこう神経と時間をつかった。日本は日本で、敗れたりとはいえ、当時の三代文部大臣——前田多門・安倍能成・田中耕太郎——らは教育勅語を執拗に擁護し、その完全排除・失効に堂々抵抗したが、所詮、占領軍の「力」の前には及ぶところとならず屈せられた。しかし、冷静に解釈しておく、「教育勅語(教育ニ関スル勅語)」なるものは一種の思想装置であって、前述したように明治23(1890)年に明治天皇の言葉(勅語)として発出されたものにすぎず、それ自体になんら法的拘束力はなかったものである。たんに、その後の文部省の取り扱いによって法的性質らしきを帯びていたものなのである。そういう意味では、あの「教育勅語」はその形式を整理されてしまったとはいえ、内容的には完全に死んでしまったわけではない。傷を負いながらも日本人の精神の中に存命中であると見ておくべきであろう。GHQの指示により国会の衆・参両院で、“あれは(戦時用語的なあの言葉は)つかわないようにしましょう”と「決議」させられたのが昭和23年6月19日。それっきりになって今日に至っている件である。無反省といえ、曖昧といえ、曖昧な国。今さら他力本願でもないが、平成の桃太郎さん何処に、と。

シカゴにも旅行兼視察に来たことがあり、児童文学者として名高い巖谷小波は、明治・大正・昭和の三代に渡って「桃太郎本」各種を書いてきた人物であるが、この一人の作者の各作品を比較して読むと、激しく移り過ぎた時代と彼の児童文学者としての良心のようなものが振り子のように揺れ動いていることに気づく。小波は、大正4年初版で昭和6年改稿の作品『桃太郎主義の教育新論』をもっているが、こんな風についている箇所がある。

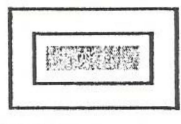
『かの老いてますます壮なる爺さん婆さん、貧に処して少しも僻まず、慾はあつて

何も貧らず、働いて骨を借しまぬ老人夫婦の下に、腕白ながら、乱暴ではなく、直情径行にして無邪気な一人子。大胆にして細心な、勇士にしてしかも慈悲あり、公平にして寛大な名将の下に、真率にして誠忠な、和仁勇の各個性を発揮して、しかも団結力ある士卒達。一として模範的ならぬはない。

そして、初めから終まで、一切積極的に進歩されている話柄は、聞く者の気を躍躍とさせて、真に儒夫(だふ=おくびょうで、いくじのない男の意; 奥泉注)をも起たしめる迄に勇ましい。しかもわが国民性を発揮し得ている。そこが最も貴いところなのではあるまいか。

こう言えばとって、僕は何も桃太郎の様に、何でも外国を征伐しろという、冒険的思想のみを奨励したのではない。ただ飽く迄この精神の、進取的に遠大なところをとるのだ。これも念のために断わって置く。』

このように、小波は、桃太郎に対して「真に国民教育の本義に適った千古不滅の好お伽話」であると絶賛を惜しまないながらも、児童文学者の顔をチラッとこのぞかせてくれる。プロの顔をしている。(つづく)



(前号から続く)

4. 桃太郎物語の異相

桃太郎の話しが、どうやら日本人だけの占有物でないらしいことは前にも述べた。特に、朝鮮半島周辺・中国・台湾などには、少なくとも類話と呼べるものが決して少なくないし、上記の各地方には更に夥しい数の類話が存在するのであろう。留学生なんかも得意になって郷土の話を聞かせるわけだ。日本における桃太郎の話しの出典ということになると、文献的には滝沢(曲亭)馬琴の『燕石雑誌』の一節がよく引用される。この説から入って行くと、桃太郎物語は『保元物語』の「為朝鬼が島渡り」の事実に擬したものであるということになる。すると、「物語」は、桃から生まれた桃太郎と、鬼が島征伐の桃太郎との二つの異なった物語が合体してひとつの「桃太郎噺」になったという説が有力なものとなり、前半の桃から生まれる噺の方が宙に浮く。江戸期の馬琴や京伝が、童話(音読でドウワ)と書いて、「わらべのものがたり」、「おさなものがたり」、「じじばばのものがたり」などと訓(よ)んでいるのを、私はいつも面白いナーと思ってしまう。というのは、桃太郎物語にはメルヘンとしての「大人になりきれない大人のための」分子が多分に含まれているように思えてならないのだ。なにしろ、桃太郎噺が誕生した室町時代末期の日本という国は、「新鋭桃太郎」が四国の小さな島に鬼征伐に向かっているやや退屈な時代であり、欧州勢力はといえば、コロンブスがアメリカ新大陸を発見し、周辺の島々を誤って西インド諸島などと命名して元気を見せていた大航海の時代であった。ポルトガル人が日本に鉄砲を伝えた頃には、バスコ・ダ・ガマがインド航路を発見し、マゼラン一行は世界を一周してしまっている。

本稿では、桃太郎物語の各構成要素を「大人になりきれなかった大人」の目でこれを分解しておくことにしたい。まず、怪しげなのは、桃の実のその形・色・味・大きさであり、それが小川を流れてきたという下りである。古来、日本人にとって、桃は股に通じていたこともここでは避けて通ることができない。ここで一挙にこの主題に深入りする前に、じっくり桃の実を観察してみよう。「椰子の実」は「名も知らぬ遠き島より」わが東海の磯に流れ着くかも知れないが、桃の実は水に沈んでしまうし、せせらぎを流れてきたとすれば形はさぞ傷んでいたことであろう。桃の実はひっくりかえしても立たないが、西欧のハート(愛・心臓)は桃の実が逆さにぶらさがった態である。お門違いも少なくないのであるが、一説に桃の実はナチュラルな「媚薬」のひとつであるともいう。この率(やく)は、男性

奥泉栄三郎

(シカゴ大学・アジア図書館日本図書部長)

自身を長大にし、女性自身を小さくする作用を助け、よって性感が一層高まり効果テキメンという世にも不思議な効きがある、と信じられてきたもののものである。そんな都合の良い薬が昔はあったのかどうか知らん。昔むかし、回春作用があると信じられてきたこの桃の実が、川上から「チンボコ・チンボコ」と流れてきたのを「食べた」老夫婦から、子が生まれたというのが原型(若返り型)か。それとも、桃の実から子が生まれてきた(果生型)のか。この問題は、どちらが正しいかの問題ではなく、日本の各地における伝承のタイプとみれば良いだろう。このように、桃太郎の出生にも秘密と諸説がある。なかでも、若返り型あるいは回春型はなんといっても庶民的で、人間臭さが匂っていい。或る書物にこうある。

『(桃果を食べて)老夫老婦毛邊(にわか)ニ若ク為リ、皺(しわ)モ伸ビ緑ノ髪ニ変ジ、三十位ノ若人ト為リ老婦は二十三ノトシマ為リケル。夫婦互ニ不思議不思議ト且驚キ且歎ビ、鏡ニ向ヒ髪ヲ結ビ・・・』

おじいさんのふるい言葉に、「桃・栗3年柿8年、柚(ゆず)の馬鹿野郎18年」という教えがある。果樹の種(たね)を蒔いてから実のなるまでの年数をひとまとめに云っている常句であるが、ここでも桃は一種早熟ではある。紙芝居の『ペチヨコちゃん』(有沢史郎作・全29巻)の中の一枚にはエロスそのものがあつたように記憶する。薄く彩色され、熟しきつた桃の実、種(たね)、子供の頭、こうした三要素を一枚に組み立て、実を割った瞬間を描写すると異様な表現となる。ペチヨコちゃんは、桃太郎の妹として出生した不思議な出ベソの持ち主で、実はこの出ベソが「指令塔」である。出ベソの先に男の子(?)の顔が付いていて、ペチヨコちゃんを大いに助け、力持ちにさせるといふ筋書きである。いろいろなケースをみていえることは、確かに桃太郎物語には婚姻譚とか性(セックス)の描出それ自体は欠落している。一説には、古くは妻まぎの部分も語られていたという。けれども、もともと「大人」の話しのものが子供相手に話され、語られている間に、そのような部分は衰弱してしまったようだ。

次に、「日本一のキビダンゴ」が気になる場所である。何故、きび団子でなければならないのか、ということになると然したる理由はなさそうである。はいい話、「日本一」はこの場合、順位(ランク)をいつているのではなく、正真正銘の、とか、偽物でない、という意味の用語である。そして、きび団子は決して高価な食べ物ではない

(田辺友三郎作詞・部分)

一方、作詞者不詳ではあるが、わたくしの口ずさむことの出来る文部省唱歌につきものがある。この「桃太郎」は、「尋常小学唱歌」(一) [明治44] に収められていて、単調な曲だが親近性がある点では抜群。しかも、多くの場合、女の先生がオルガンを奏しながら一小節を範唱すると、児童はそれにつれて歌うという光景がよく見られた。それにしても、当時は勇ましかった。

- 一 桃太郎さん桃太郎さん、
お腰に付けた黍団子、
一つわたしに下さいな。
- 二 やりませうやりませう、
これから鬼の征伐に、
ついて行くならやりませう。
- 三 行きませう行きませう、
あなたについて何処までも、
家来になって行きませう。
- 四 そりや進めそりや進め、
一度に攻めて攻めやぶり、
つぶしてしまへ鬼が島。
- 五 おもしろいおもしろい、
のこらず鬼を攻め伏せて、
分捕物をえんやらや。
- 六 万々歳万々歳、
お供の犬や猿雉子は、
勇んで車をえんやらや。

上の歌が一層エスカレートすると、どうなるか。太平洋戦争末期になると、わたくしも桃太郎の側にあった。「桃太郎の出陣」(百田宗治作・昭和19)によれば、日本のこどもは、すべて「桃太郎」である。こまでくると、男の子も、女の子もあつたものではなかった。

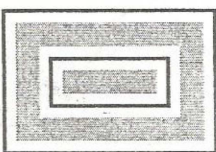
日本ぢゅうの子供が桃太郎になる。
日本ぢゅうの子供が
一人残らず桃太郎になる。
つよい やさしい桃太郎になる。
日本ぢゅうの桃太郎が
くらい夜明けに出陣する。
左様ならと言って出陣する。
おじいさん おばあさん 左様なら、
日本ぢゅうの桃太郎が出陣する。
桃太郎が出陣する。
桃太郎が隊伍を組む
どっし どっしと足踏みをする。

(第二連・以下省略) (つづく)

ことに注目して置きたい。食べ物として稀というよりは、むしろ粗ではあるが、純で光沢があり、モチ米以上に腹に持つという食料である。毎日放送アミューズビデオで発売している『まんが日本昔ばなし』(文化庁優秀映画作品賞/アニメグランプリ・アニメージュ賞/他受賞多数)の中の『桃太郎』の巻では、いったんは桃太郎が鬼に踏んづけられてやられ、この団子を食べると瞬間的に勇気の力が出て今度は反撃にでるという内容となっている。一方、このビデオでは、家来たち(サル・イヌ・キジ)はすでにきび団子を食べた後であった。つまり、ひとつの大事な儀礼が済んでいたことになる。主人と家来たちが同じ食べ物を味わっているのは、腹ごしらえプラス直会(なおいらい)の意があり、主従共食することによって、両者の親密さの度合を強め深め、よって平和の保証を得ようとするものである。この種の《一味同心》の習慣は、中世の郷村制や共同体において極めて根強くみられ、天皇制や武家社会、主従的結合、同士の結合、団体行動などの諸面で、今に生きているのである。功罪分かち難き慣行の最たるもの一つではあるまいか。

ことのついでに云えば、あとひとつ詩歌の中の桃太郎像が残っている。桃太郎関係の詩歌は数々あれども、一般的にいってしまえば、作品として特に優れたものはない。ここで取り上げておく理由は、桃太郎伝承童話とひと組になって、広く愛唱された事実と世相と大人が子供たちをみていた眼にある。「子供たち」とは、言葉をかえて云えば、ある意味で無力な普通の市民・国民と言ってもよい。明治33年(1900)以降、第二次世界大戦期にかけて、子供たちは次の「モモタロウ」を歌って楽しんだ。初出(原文)は全文カタカナで書かれていたといわれ、文語体を随所に残しながらも、言文一致の代表作ともいわれているが、・・・。

- 一 モモカラウマレタ モモタロウ
キハヤサシクテ チカラモチ
オニガシマオバ ウタントテ
イサンデイエヲ デカケタリ
- 三 ハゲシイイクサニ ダイショウリ
オニガシマオバ セメフセテ
トッタタカラハ ナニナニゾ
キンギンサンゴ アヤニシキ



5. 外国語になった

奥 泉 栄 三 郎

(シカゴ大学・アジア図書館日本図書部長)

『桃太郎』本

ここ数年間、東京・永田町の国立国会図書館では根気よく「常設展示会」を開催してきたが、その第33回の展示題目は【日本の民話——人生の最初にめぐりあった本『桃太郎』——】というものであった。展示期間中の平成5年3月23日から4月23日にかけて何かと話題を集めたことはいまでもない。このとき、ワープロ打ちと思われる質粗な一枚ものの展示内容案内シートが用意されていた。正確に云うと、日本語版と英文版(英訳)がそれぞれ一枚ずつあり、日本文のトーンはさておき、その英訳そのものにひかれたことを思い起す。ここに再現してみると、こんな調子であった。

Japanese Folklore

——“Momotaro, the peach boy”,
the first book we read as children——
We get to know folktales as children,
and they become part of us. Whenever we
hear or read, “Once upon a time...,” we
are carried back into the world of our
imagination. This display focused on
Momotaro, one of those wonderful magic
stories that everybody knows. The folk-
tales of Momotaro, found in many parts
of Japan, has been translated into many
foreign languages and is known over-
seas. It did not remain a children's
story, but underwent many interpretati-
ons in each age. At one time, it was ev-
en used as a basis for moral education.
The more we read it, the more we find
in it, so go your personal journey into
the world of Momotaro.

最近ではめっきり外国人の利用客も多くなつた世界に誇る国立国会図書館のことであるから、この点をくみ取って同館が蔵書の中から、『桃太郎』本の露語・独語・仏語・英語などの各訳本をも展示したのは道理にかなっている。というよりは、むしろ、展示本の数々は参観した日本人——大人も子供もといいたところだが、子供は同館に極めて入りにくく・・・——の眼を改めて世界に開かせたという点で、各様の効果があったように思う。

特に、この展示会に出品された「桃太郎」英訳(訳述)本が良い。明治18年(1885)に東京の弘文社から出された9枚ものの『再販桃太郎』(Momotaro reprinted)もそのうち

の一つであった。本書は『日本昔噺』シリーズの第1巻(Japanese Fairy Tale Series; No. 1 = Momotaro or little peachling)をオリジナルとするもので、江戸時代の文久3年(1863)に来日した宣教師ダビッド・タムソン(David Thompson)の翻訳として知られてきた。長谷川武次郎らの外国向け木版絵本の出版商が発行元となり、何人かの「在日」外人を動かしてものにしたものであった。タムソンは米国長老派宣教師として伝道に従事するかたわら、横浜英学所や大学南校(現東京大学の前身)の教師をしていた人物である。諸藩の視察者30名を引率して一時帰米し、一年余の後再来日して築地の東京基督公会の初代牧師を勤め東京に没したといわれる、日本ひいきの一人である。

上記の本は使用されている和紙がクレープ状になっているところから、縮緬(ちりめん)本(silk crepe book)ともよばれ、外国人が帰国する際のお土産としてその当時はたいそう重宝がられ、ひいては西洋諸国で日本文化が紹介されるのに大いに役立った。いまでも、時々、シカゴや中西部の古本屋やアンチック・ショウなどで本書の類が店頭にならぶことがある。ストーリーもさることながら、製紙や印刷の技術、それに挿絵のオリエンタリズムが喜ばれるのだ。もっとも、調べてみると少なくとも、この同じ年にロンドンとシドニーでもMOMOTAROが出版されている。してみると、「桃太郎」はこのころすでに仏教圏あるいは東洋圏から外界にむかい、キリスト教圏あるいは欧米世界に出回っていた、ともいえる。こういうのは明らかに、桃太郎の他国への「遠征」ではなく、文化交流的な「使節(ミッション)」行為だから、文句なく楽しめる。

わたくしは、この過程で日本文(語)が整理され簡潔化され、それによって物語自体も簡潔性をたかめることとなった点も指摘しておきたい。とくに、明治36年に『和英対訳日本昔噺』が出た際には、こうした努力が際立っている。閉鎖的な自国内の物語が、翻訳という変換装置の中でより大きな世界に溶け込んで普遍化してゆく好例であろう。いうまでもなく、せつかくの本来の味覚が「国際化の過程」で風化されてしまう恐れも結構高い。ましてや本書『桃太郎』の場合のように、英語を学ぶ学生のため、あるいは日本語を学ぶ外国人のためのテキスト的性格がつよくなると、伝承的ニューアンス等は軽視されがちである。事実、訳出

にあつたリッデル等は津田塾(現津田塾大学)の諸嬢をアシスタントとして、和文(原文)の叙述に忠実に、しかも、平易な語彙で翻訳をまとめている。欲を云えば、翻訳者には地方に向かわれて、その辺りのお嬢さん方にヘルプしてもらうのがよかった。余談になるけれども、リッデル(Hannah Riddell:1854-1937)は、本場英国の貴族の出だったからナー。彼女は英国聖公会宣教協会婦人宣教師として、教育勸語が發布された年の明治23年(1890)に来日し、熊本市郊外の本妙寺で群がるライ患者を見たのを機に、みずから熊本回春病院を創設し、終生この方面の事業に献身した聖女である。こういう偉大な女性の生涯を偲びながら、すがすがしいその文体例を本紙への寄稿の記念として紹介しておく。

MOMOTARO: THE STORY OF PEACH-BOY

Very very long ago, there lived in a certain place an Old Man and an Old Woman. One day they both went out in different directions; the Old Man went to the mountain to cut fire-wood and the Old Woman went to the river to do some washing. The Old Woman soon got to the river and set her little washing-tub in a good place, ... then she took out of it, one by one, the things she had brought in it to wash; ... shirts stained with perspiration and an old worn-out unlined gown, and she was washing away at them when, suddenly, from the upper part of the river, an enormously large peach, big enough to full your arms, came plunging and tumbling down the current!

The Old Woman seeing the peach, said, nodding her head as she talked, "Well! well! that is a fine peach! I am sixty years old this year and in all my life I have never yet seen such a large one! I expect it would be very sweet eating! I will go and pick it up at once and give it to my Old Man as a present, ... that will be the thing to do," and she stretched out her hand to the peach but could not reach it. She looked round about her in every direction for a stick but there was not one to be seen. She was rather perplexed as to what to do, when she suddenly thought of a plan! ... she turned towards the peach as it came floating down the stream, and clapping her hands seductively, said: ...

"The distant waters are bitter!

The near waters are sweet!

Shun the bitter!

Come to the sweet!"

This she repeat two or three times. The peach came on little-by-little, ... little-by-little, and, strange to say, when it got in front of the Old Woman, it stopped!! She picked it up quickly, hurriedly gathered together her wash-

ing, then putting the peach under her arm she hastened back to her own house and waited impatiently for her husband's return, thinking, "When my Old Man comes back how pleased he will be!"

「桃太郎とキリスト降誕の予言の一致点」に強い関心を寄せたのは、大正の初めまでハワイにおり、その後天津(中国)に赴いたツイン博士(万国改良会亜細亜部長で中国や日本の古典に通じた米国学者)である。大正6年(1917)4月4日の『日布時事』紙の報ずるところによれば、同博士は桃太郎の物語とキリスト降誕の予言との間には、(1)世界の最も古き予言なること、(2)世界の人の希望であること、(3)珍しき前兆なること、(4)不思議の降誕なること、(5)救いの大将なること、(6)救いの弟子たちを有すること、(7)新しい命に関すること、(8)戦争のこと、(9)勝利のこと、(10)幸福のこと、等々重なる点が多い、という。中国でこのような学説を発表した同博士の説は大略次のようにつづく。

基督(キリスト)は処女マリアから生まれて其の父親はなく全く聖霊から生まれたものであるが、桃太郎も桃から生まれたとあつて父親はない。即ち、桃太郎が神意を受けて生まれたという点は、基督を神の子なりとする点と似ており、また、聖書に水と霊とによって生まるとの予言を載せてあるが、桃太郎が川から流れた桃から生まれるという点が之に似ている。基督の弟子たちは、皆最初は卑しい漁夫などであつたが基督から命のパンを貰うと、皆立派な人物となつた。桃太郎の家来はキジ・犬などの動物としてあるが、キビダングを貰うと立派な家来となつて働いた。

ツイン博士は発表の、そのしめくりに自ら日本の桃太郎の唱歌を改作し、流暢な日本語で朗らかに歌つたと謂う。その一節は――

神から生まれたイエスさまは
気は優しくて力持ち
アクマの首領を打たんとて
勇んで家を出かけたり――。

[この『日布時事』の記事は目下ハワイ大学客員教授の政治学者太田雅夫氏(桃山学院大学教授)に提供していただいたもの]

わたくしは、ながい米国生活のなかで或るとき『日本昔噺善悪桃太郎』(英文)に生まれて初めて接する機会があつた。珍しいものなので、ちょっとこの本の書誌的事項をまず整理してご覧にいたい。

刀工・・・牧野綾水

画工・・・野村芳国

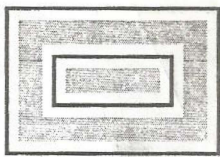
出版人・・・笹田弥兵衛・福井源次郎/
京都府平民

翻訳人・・・阿部直秀/東京府士族

発行年・・・明治20年7月19日著作権免許
・同年8月出版

摘要・・・表紙に侍姿の桃太郎。ページ付けはないが、見開き各頁に採色挿絵8葉あり。

このGOOD AND EVIL MOMOTAROの内容については、次回をご期待下さい。(つづく)



<前号につづく>

私が手にした『日本昔噺善悪桃太郎』の内容全文は、以下の如くである。このように英文ものは何種類か存在するのであるが、本書は挿絵とあいまって特異中の特異な物語である。先般、私はオランダのライデン大学図書館において、和装ドイツ語本たる *Oder Pfirschling* [桃太郎] の所蔵も確認した。これは、東京の弘文社により明治22(1889)年10月に発行されたもので、鮮斎永濯画 *H. Schipplock* [ヘッドウィック・シプロク] 著となっており、19cm大の版であった。

Good and Evil Momotaro

Once upon a time, there was a man named Momoemon. He was feeling very sorry for having no child, till his hair had grown gray with age. One day, when his wife was returning from Ujigami (a god who watches the prosperity of the locality) she saw large momo (peaches) so born on a stalk, that might be called twine peaches floating down the brook on the wayside. She instantly got them up, and took them home to her husband; and they ate them all, though one of them was sour, and another sweet.

And wonderful to tell, she conceived soon after that! You may guess how joyful their hearts might be. They thought it was by the almighty power of Ujigami, and thanking him with their hearts, they waited hardly the time of her parturition. When the time came, lo! a boy of two heads was born. They mourned of his deformity, but they loved him exceedingly. It is common feeling of a parents to love deformed child more dearly. They gave him the name of Momotaro, and took charge of his welfare by trusting him to the hand of a kind nurse.

Now I am very sorry to tell you that as Momotaro grew on to be a young boy, his one head got wrong and wicked, while another one, honest and kind. His two heads had often to quarrel that they might be able to act according to their own natures. The commands of the one head were honest and kind to the servants, but the other very cruel; the one offered to work

奥 泉 栄 三 郎

(シカゴ大学・アジア図書館日本図書館長)

deligently[sic], another desired to be idle. One midnight, the evil head, while the good one was sleeping, got up and intended to go secretly to a kura to steal money. (Kura is a building in which valuable treasures, money and the others are secured from thief and fire, etc.). But just when he intruded into it, the good head awoke, and advised the evil head to stop his intention to commit such a crime. Getting angry at it, evil head slapped the good head and hurt him seriously. Hereafter the one head became the bitter enemy of the another, and always they were at quarrel with each other, which was the matter of pains for his parents. At last, Momoemon took him to Chinkidojin a wizard and consulted with him about the condition of his dear boy. "Sit down and listen me, my boy" he said, "There was a dog that drowned in a well by intending to catch its own image which was seen in it. How foolish it was! Your evil head is just like the image in the well. If the image were not seen, the dog would have not drowned. It is not safe for a man to have two heads on one body, ... really to have the evil head." and he hit the evil head with his holy cane, and immediately it fell asleep, gradually it disappeared and there only remained a little wen in the place of the evil head. Then he became a good and honest man, and now his parents were enjoying the life with their only child.

6. コンピューター検索に見る文献群

桃太郎は、同じおとぎ噺でも、「金太郎」や「浦島太郎」や「一寸法師」とちがひ、ダン凸で文献が豊富だ。それだけ、スケールの大きい噺とも云えようが、私としては、それだけ桃太郎は内容が曖昧かつ中途半端で、しかも意外で新奇なところがあり、それ故にこそ各様のバージョンをもって語り継がれてきたばかりではなく、書かれたり、引用されたり、利用されたりする対象に足るのではないかと受け止めている。

東京の国立国会図書館のNORENデータベース中の明治期刊物の目録情報を、「書名中に“桃太郎”という語が使われているもの」という指定でコンピューター検索をして見たことがある。その結果をここで紹介しておく、43件がヒットし、うち出版地としては大阪4件、京都と名古屋が各1件、残りは全部東京という具合であった。この43件というのは、国立国会図書館が現に所蔵している『桃太郎』書籍のうちの明治期に刊行されたものの総数であるが、明治期に実際には日本全国から100とも200ともいわれる種類が出回り、また、ロンドン他の外国の都市からも良いものが出ていた、と推定してもまず間違いはなかろう。明治38年刊の『韓文日本豪傑桃太郎伝』（全79ページ）は、膨張する日本の証しであり、陣羽織や軍服姿のものが日本の植民地で読まれていた事実は、今後新しい視点から研究されて良い課題と云えよう。「桃太郎」がいつに戦前の軍国主義と富国強兵のナショナリズムと結びついてきたかについては、鳥越信の『桃太郎の運命』（日本放送出版教会・1983年5月刊）に詳しい。ほかでもなく、桃太郎の運命は、すなわち、日本の運命そのものようであった。

雑誌論文や新聞記事を含めて、明治・大正・昭和前期は、桃太郎像が純然たる童話から、つまり、前垂掛の桃太郎から、強い「強い主人公」へと一点張りで変容して行く。戦後このかたになると、桃太郎はオリンピック級の万能人気選手にたとえられる。とにかく、「民主主義桃太郎」の顔が成熟し、滅法広くなっているのである。例えば、1990年代に発表された学術雑誌論文・記事の中だけでも、次のような「桃太郎関係大論文」があつて、思わず噴き出してしまふ。立川談志は桃太郎を落語に引っかけているし（『中央公論』94年11月号）、「まちのかおづくり——桃太郎大通りの整備（地域づくりと道路整備＜特集＞）」は、『道路』という専門雑誌の92年11月号の記事である。「中国の桃の実と、わが桃太郎の伝説」（『文化』[東北大学文学会・90年9月号]）や「桃太郎の誕生——近代の文学研究に示唆するもの」（『国文学解釈と鑑賞』[91年12月号]）などは、真摯な調査と研究の成果である。「生きる—20—桃太郎」（『諸君』[90年11月号]）などは一般読者向けに執筆されている例だ。桃太郎の知名度をチャッカリ借用している形の食物名や商品名だって少なくない。「園芸学会雑誌」上では桃太郎という種類のトマトがあることを報じている（現にわが家の裏庭で盛んに実っている「ピーチ・ボーイ」のこと）、高圧ガス装置のエキスパートシステムに「桃太郎」の名がつくものがある（『安全工学』[92年6月号]）。

当のシカゴまたはイリノイ州からも桃太郎本がなにか出ていないか、ということで探索してみると、やはり、あるのだ。1963年と1967年にシカゴの出版社（Follett Pub. Co.）から Momotaro: a Japanese Folk Tale Retold(全32ページ)が出ているし、グレンビュー（Glenview, ILL）の出版社から発行されている The Scott Foresman Anthology of Children's Literature(全1002ページ)にも、桃太郎はチャンと収録済である。

7. 桃太郎は日本人か

童話や民話の世界から飛び出して、桃太郎を日本人の精神的に眺望してみると、桃太郎のナショナリティーは必ずしも「日本籍」とは云えない面もある。普通の人の心の中の願望とか理想像を桃太郎にもとめる見解も面白い。この考えでいえば、自分（日本人）でないもの、つまり、魅力的に鏡にうつる他者としての桃太郎に親しみを感ずるという見方は依然として絶対優勢である。この場合は、むろん、「気は優しくてもちの桃太郎さん」である。

一方、鬼を退治して鬼が島から山盛りの宝物を荷車に積んで持ち帰ってくる桃太郎は、解釈如何では「卑しい精神の持ち主」でさえある。なんとすれば、特に旧制の神聖なる日本帝国の臣民においては、その程度の分捕物や何かに目がくれていたわけではないという主張もあるからである。日本人は経済上の実利を上げたとたん、直ちに撤退してしまう「桃太郎主義」を好まない。それに、日本人なら、桃太郎の手足になった犬や猿が徐々に不平を言い出してきた場合のことも、これを十分に読んでいる。日本人なら、兵糧の吉備団子を喰い尽くしてどうにもこうにもしようがなくなってしまう事態の覚悟もすっかり出来ているだろう。

寺子屋式の蘭学塾から今日の慶応義塾の基盤を築いた福沢諭吉は、著作『ひびのをしへ』の中で、「桃太郎は盗人とも云うべき悪者なり」と断じている。福沢一流の世間の意表を衝いた言葉と受けとめられるが、彼には、海の向こうに行つて「不思議なお土産」（日本の文化と教育の近代化に役立つ情報と品々）を持って帰つたという自負の念が少なくなかつたであろう。ひとは誰でも、福沢は桃太郎に良く似ている人、と云うことはできる。けれども、両人とも「そっくりさん」ではないし、ましてや「同じ」ではない。

要するに、日本には「桃太郎」がいない。